

保守主義の概念と特質

——保守主義の理論的考察に向けて——

一 問 題

世界的に、政治の領域においてのみならず、社会全般にまでわたって「保守化」が進展しつづけると言われて久しい。

例えば、アメリカ合衆国では「新保守主義(Neo Conservatism)」と称される政治上・思想上の動向が存在しており、日本でも近年、村上泰亮、山崎正和、西部邁等、「新保守主義者」と呼ばれる人々が出現している。しかしながら、この両国の動向は、同じ名称を冠せられてはいても、内実まで同一であるとはいえない。アメリカの「新保守主義」は基本的には、ニューディール以来の福祉政策の進展に異

小 川 賢 治

議を唱える立場として登場して来たのに対し[Ashtford, p. 354]、日本の新保守主義は、いまだ理論的な性格づけは為されていないとは言え、アメリカにおける潮流と同じものでないことは確かであろう。しかも、両国いずれの保守主義も、「新保守主義」と一括することが必ずしも容易でないような多様な立場から成り立っている。アメリカの新保守主義は、ある論者によれば、四つのグループに分類することができ[中野、二三九頁]、また日本においても、上に例示したわずか三人の間においてさえ、西部が山崎を、(真の)保守主義者ではないと厳しく批判するなど[西部、一五五頁以下]、単一の集団として一括することは困難である。このように近年注目を集めている新保守主義であるが、

それに関して為されている議論はおおむね現状の紹介と分析が中心であり(例、「中野」,「佐々木」), 多様な保守主義の潮流を統一的に把握しようするような理論的枠組は現在のところ提出されていないように思われる。

ところで、このような多様な保守主義が分立しているのは、そもそも、「保守主義」なる概念が一義的に確定していないがゆえであると言えよう。Aの論者がある現象を「保守的」とみなし、Bの論者は別の現象を、Aとは異なった意味で「保守的」だと主張し、彼らを論評しようとするCは彼に独自の「保守主義」の概念をもって論じる、という事態が生じうるのである。

このような保守主義概念の未確立は、他方では、保守主義の対極概念として様々な概念が乱立することを許している。ある時には保守主義の対立概念は自由主義(liberalism)である(例、[Wilson]), またある時には進歩主義(progressivism)が保守主義の対極に位置するとされる(例、[Mannheim, Teil II-4])。しかしまた別の場合には急進主義(radicalism)こそが保守主義の対立概念であると言われるのである(例、「Huntington」[Centers])。

このように多様な対立概念が存在しうるのは、保守主義

の概念そのものがきわめて多義的であるがゆえである。この点からも、保守主義概念の明確化が大いに必要であることが指摘できる。

二 保守主義概念の諸側面

保守主義という概念に含まれるこのような多様な意味をいかに分類すべきかに関して、幾つかの所説を参照しながら検討を進める。

H・セシルは保守主義を、政治的な保守主義すなわちイギリス保守党の政策に現れているような保守主義と、(保守党支持者に限られない)人間一般の変化を厭う自然な心情としての保守主義の二つに区分する。この両者は全く関連を持たないわけではないが、本来別個のものであると考えられている[Coell, pp. 6 f. 訳書、二頁以下]。

またK・マンハイムも同様に保守主義を、「一般的な社会学的概念」としての保守主義である「伝統主義」(「Traditionalismus」)と、「歴史的な社会学的概念」としての保守主義の二つに区分している[Mannheim, S. 92. 訳書、七九頁^註]。伝統主義とは「旧来のものに固執し、改革に携わるのを好まない」ような「人間の一般的な心的素質」であり、換言すれば、「形式心理的本性」であるとされている[同、S. 93.

八〇—八二頁。これに対して歴史的・社会学的な保守主義あるいは政治的・精神的な潮流としての保守主義は「近代思考史」における統一の潮流としてはじめて語りうるものであり「598、七九頁」、特定の歴史的・社会的な刻印を帯びた現象である。両者の差異を別の表現で表すならば、伝統主義的行為が「ほとんど純粹に反動的 (reactionary) な行為である」のに対し、「歴史的・政治的な」保守主義的行為は意味指向的 (sinorientiert) な行為である」と言いうる。この点から見ても二つの保守主義は全く別個の概念であるから、「政治的な進歩主義者が日常生活においては伝統主義的に行動することにも何ら矛盾はない」と見ることが出来る [597、八四頁]。

この二人の論者のように保守主義をおよそ政治的な保守主義と非政治的な或は日常的な保守主義に区分する見解はよく見られるが、小松茂夫においてはより詳細な分類が為されている [小松 (以下同じ)、二三九頁]。

小松は保守主義を大きく、政治的保守主義と非政治的保守主義に二分する。政治的保守主義は更に、(イ) 内容的保守主義と (ロ) 形式的保守主義に、非政治的保守主義は (ハ) 文化的保守主義、(ニ) 社会的保守主義、(ホ) 自然的保守主義に細分される。

(イ) (政治的) 内容的保守主義とは、「一定の (政治的な) 内容的価値を選択的に保守するところに成立する保守主義」であり、普通に、政治的保守主義と呼ばれるものである。これに対して、(ロ) (政治的) 形式的保守主義とは小松に独自の概念であり、「進歩政権にせよ反動政権にせよあるいは保守政権にせよ、つまり、その信奉するイデオロギーの如何にかかわらず、政権の座にあるというその事情によって、「現状」の維持、つまり、現状の「保守」につとめ……、という具合に、内容的価値が、いわば、捨象されている保守主義のことである」 [二三九頁]。

他方、非政治的保守主義において、(ハ) 文化的保守主義とは、「文化諸領域——宗教、道徳、芸術等——における守勢の顕著な……理論、思想、思潮、傾向等々を指すことば」である [二二七頁]。(ニ) の社会的保守主義とは、「理論ないし思想というような形態にまで、つまり、自覚的な思維形象にまで高められることはなく、日常的な思維のなかで日常的に機能している、……変化を嫌悪し、それを、可能なかぎり、回避しようとつとめる守勢の思維態度を指すことば」である。また、(ホ) 自然的保守主義とは「気質性格等心理的なものに基礎をもつ、あるいは、性、年齢、健康等々の生理的なものに基礎をもつ……守勢的傾

向」または「気分」を意味している「同頁」。

これらの見解に鑑みるならば、保守主義の概念はおよそ次のように区分するのが適切であると考えられる。A、保守的な心理。B、現状追従傾向としての保守主義。C、思想・思考様式における保守主義。D、現存政治社会体制維持主義としての保守主義。

A、保守的な心理とは、過去から存続してきたものに執着をもつ人間の一般的な心理特性であり、変化を忌避し、それゆえ、改革に携わるのを厭うような根本的な心理傾向を意味する。そのような心理的な保守性は、場合によっては性・年齢・健康等の生理的なものにも根拠をもち、従って、社会的な条件に左右されず、あらゆる人間に普遍的に見られる保守性である。

これに対して、B、現状追従傾向としての保守主義は、Aの保守的な心理と近接したものであるが、より社会的な要因にかかわっており、社会の現在の状態に追従・順応していこうとする社会的態度を指す。これと、後に述べるD、現存政治社会体制維持主義との相違を述べれば、このB、現状追従傾向としての保守主義は、積極的に現在の社会秩序を支持するというよりも、現在の社会状態にあえて反対する必要もなく、単にそれに付き従っていこうとする、と

いう種類の消極的な保守性を意味し、従って必ずしも当事者たちに意識されていない態度傾向である。近年、政治的な保守主義とは別個の概念として用いられる「生活保守主義」はほぼこれに該当すると考えられる。これに対して、G・D・ウィルソン等の保守主義研究〔Wilson〕は、その『保守主義の心理学』というタイトルにも明らかなように、主としてAの心理学的な保守主義を扱ったものと言える。

なお、セシルの言う「自然な保守主義」あるいはマンハイムにおける「伝統主義」はこのA、保守的心理とB、現状追従傾向としての保守主義を必ずしも区別せずに概念化しているように思われる。

次に、C、思想・思考様式における保守主義（あるいは哲学的保守主義）とは、時代を超えて普遍的に妥当するとされる保守的な観念や思考様式を意味する。R・ニスベックが社会学の成立と発展との関わりで論考の対象としている保守主義は、主としてこの哲学的保守主義〔Nisbet, 1952, p.167〕であると言える。ニスベックにおいては、人間と社会の本性に關して、合理主義的なあるいは個人主義的な見解とははっきり区別される保守主義的な一般的命題があるとされる。そのような命題として、例えば、一、社会は単なる個人の集合体ではなく有機的な実体である。二、社会

は個人に優越しており、人間は社会によってのみ真の人間となりうる。三、人間の経験において聖的なもの、非合理的なものは不可欠の価値を有している。四、社会の安定のためにヒエラルヒの存在が必要不可欠である、等々の命題が挙げられる〔同、pp. 169-172〕。

最後に、D、現存政治社会体制維持主義としての保守主義とは、普通には政治的保守主義と呼ばれるものであるが、ここでは、現在の政治的・社会的な諸制度を積極的に守ろうとする、という意味を明示して概念化する。これはCの保守主義的な思想・思考様式と結びつけて考えられがちであるが、概念的には独立である。例えば、上に見た、人間の経験において聖的なもの、非合理的なものは不可欠の価値を有している、という保守主義的な思想とは本来無縁の合理的なブルジョアジーが、近代資本主義的諸制度に關しては保守主義たりうることをそれを示している。

保守主義は以上のように分類しようと考えられるが、保守主義を論じる際には、「保守的」の意味を限定することに、また、B、現状追従傾向やD、現存政治社会体制維持主義のような、「保守」の語を含まない概念を用いることによって、無用の混乱を避けることができると考えられる。

このような保守主義概念の区分が設けられるならば、はじめに見たような保守主義の対極概念をめぐる混乱を整理することができる。

まず、マンハイムが十九世紀前半のヨーロッパ思潮の分析において、保守主義はブルジョア的自由主義に対抗するものとして成立したと論じる場合には〔Mannheim, Teil II-2〕、封建貴族階級の政治的な保守主義が中心に考えられていたと言いうる。しかし、同じマンハイムが保守的思考の形態学を分析する際には、進歩主義が保守主義と対立するとされているが〔Teil II-1〕、この場合には概ね哲学的な保守主義（保守主義的な思潮）が考えられていたと言えよう。また、S・P・ハンチントンが保守主義の対立物は急進主義であるとしたのは、これらとは異なって、保守主義の本質的属性に分析の焦点を置いた結果であったと考えられる〔Huntington, p. 458〕（後述）。しかし、用語上は同じ急進主義を保守主義の対立項としたR・センターズの場合には、一般的な社会心理学的態度としての保守主義を中心に据えており、この点でハンチントンとは異なっている。

保守主義概念を区分することによって、さらに次のような問題を考えることができよう。第二次世界大戦後の資本主義諸国家における「保守主義」政党は、原子力の利用を

はじめとする技術革新に関しては積極的な立場をとり、決して「保守的」ではなかった。むしろ「進歩主義」政党が、特に原子力の導入に関しては否定的であり、この限りで「保守的」と称することも不可能ではなかった。しかしながら、この事態を混乱なく把握するためには「保守主義」あるいは「保守的」という語がいかなる意味を——政治的な意味か他の意味か——与えられているかを明確にしておく必要がある。上記の保守主義政党が「保守主義」と呼ばれるのは、それが現存の資本主義的社会・政治体制を保守しようとするがゆえである。それが科学技術の利用に関していかに先進的であろうとも、そのことは政治体制に関して保守主義的であることをいささかも妨げない。逆に進歩主義政党が原子力の利用という領域で保守的な場合があるとしても、政治体制に関しては保守主義の対極に位置しうることには何ら変わりはないと言わなければならない。

このように、「保守化」あるいは「保守主義」を論じる場合には、いかなる意味での「保守化」あるいは「保守主義」が考えられているのかを常に明確にしておかなければならないように思われる。

三 保守主義の本質的属性

次に、保守主義（特に政治的な保守主義）を保守主義たらしめている最も本質的な属性は何かという問題について考えたい。ここでは、S・P・ハンチントンの所説を追いつながら検討を進める。

ハンチントンによれば保守主義とは、既存の制度の正当性が根本的な挑戦を受けた時に、その制度の支持者たちがそれを防衛しようとして形成するイデオロギーである〔Huntington, pp. 454-455〕。例えば、貴族階級のイデオロギーが保守主義と呼ばれるのは、彼らの利益に合致した封建的諸制度が新興のブルジョアジーによって脅威を受けた時に、それを防衛しようとして形成されたイデオロギーだからである。これと同様の状況は、ブルジョア的諸制度に対してプロレタリアートが否を叫ぶ時、また、第二次世界大戦後のアメリカ合衆国においては、古典的な自由主義に対して福祉指向的自由主義の陣営から異議申立てが為される場合のように、歴史上くりかえして出現し、その都度それぞれの保守主義が成立する。その際保守されようとする既存の制度がいかなる性格のものであり、また異議申立てを行なう陣営がいかなる種類のものであるかは、歴史上の局

面によって多様であり、特定のものに限定されない。

保守主義がこのような本質的属性を有することは、保守主義というイデオロギーそのものの持つ特質を明らかにすることによっても示される。ハンチントンによれば、保守主義は急進主義 (radicalism) 以外の一切のイデオロギーと異なった特質を有している [同、p. 457]。すなわち、自由主義・民主主義・共産主義・ファシズム等、大部分のイデオロギーは、政治社会をいかに組織すべきかに関して構想をもっている。例えば、権力をいかに配分すべきか、政治・経済・軍事の相互関係はどのようなべきか、行政・立法諸機関はいかなる形態をとるのが望ましいか、等々に関する構想である。ところが、保守主義にはこれらの点に關して必ずしも明確なイメージが存在しない。保守主義には実質的な理念というものが無いからである。

ハンチントンの挙げる例を引けば [p. 458]、(一九五七年当時の) ポルトガル・イギリス・アメリカという三つの社会の政治体制を比較して、ポルトガルの政治体制は他の二つの社会の体制に比べて権威主義的理念に近いと言うことができ、同様にイギリスは相対的に社会主義の理念に近く、アメリカは民主主義の理念に近いと言う。またこの三つの体制のいずれも共産主義の理念からは懸け離れている

という主張も成り立つ。しかし、この三者の内どれが最も保守主義の理念に近いかという間に答えることはできない。なぜなら、判断の基準となる保守主義の理念というのがそもそも存在しないからである。いかなる社会にも保守される対象となる制度は存在するであろうが、保守主義的な制度と呼ぶものはどこにも存在しないのである、とハンチントンは言う。

このことは彼の区分する固有イデオロギーと位置イデオロギーの相違からも言うことができる [p. 455-460]。固有イデオロギー (inherent ideology) とは、固有の特性を有する社会集団の利益を理論的に表現したイデオロギーである。例えば、自由主義というイデオロギーはブルジョアジーという社会集団の利益を表現する固有イデオロギーであり、社会主義はプロレタリアートの利益と要求を表わす固有イデオロギーであるとされる。他方、位置イデオロギー (positional ideology) とは、特定の社会集団の持続的な利益や要求を反映するものではなく、その集団と他の集団との社会的な位置関係に依存するイデオロギーである。その一例として保守主義のイデオロギーが挙げられる。というのは、保守主義は、現在の社会秩序を否定しようとする社会集団とそれを擁護しようとする社会集団が並立する時に

はじめて成立するイデオロギーだからである。固有イデオロギーが、ある社会集団が他の社会集団といかなる関係にあるうとも、その特定の集団の関数であるのに対し、位置イデオロギーは、いかなる社会集団であるかにかかわらず、ある集団と他の社会集団との間に成立する社会的位置関係の関数であると言える。

ハンチントンによるこの固有イデオロギーと位置イデオロギーの区別は、私見によれば、視点の相違によるものであって、同じイデオロギーが文脈によっていづれにも見なされうる。例えば、十八世紀後半から十九世紀初頭にかけて存在した貴族階級のイデオロギーは、その内容から見れば、貴族階級の固有の特性を反映した固有イデオロギーであるが、他方で、新興市民階級との対抗の過程で成立したものと見る場合には位置イデオロギーであると考えられる。同じことが市民階級のイデオロギーに関しても妥当する。

すなわち、十八世紀後半には封建的な社会・政治秩序に異議を唱えて、自らは保守主義の対極にあった市民階級が、十九世紀以降はブルジョア的社会秩序に対するプロレタリアートの側からの攻撃に対抗して、自ら保守主義者となったのである。この間、彼らのイデオロギーは、位置イデオロギーとしては反保守主義から保守主義へと転換したが、

固有イデオロギーとしては、私有財産制の擁護、代議制民主政治の尊重といった基本的な点で一貫性を維持しているのである。

これらの例はまた、いかなる固有イデオロギーが（位置イデオロギーとしては）保守主義イデオロギーとなるかは、歴史的状况が異なるに応じて変化する、ということをも示していると言える。

以上に見てきたように保守主義は、現存の社会諸制度が何らかの社会集団によって否定されようとする時に、それを擁護しようとする社会集団の側で形成されるイデオロギーであるが、このことはまた、保守主義的な思考様式に含まれる特徴的な要素を検討することによっても示される。

保守主義的思考様式の特徴としては、既に哲学的保守主義の例としても示したが、他に、歴史における「神の術策」への信仰、慣習の権利と伝統の尊重、抽象と思弁の哲学に対する嫌悪、個人の理性に対する不信、有機的な社会の概念、人間悪の強調、社会的差別の必然視などが挙げられる〔Huntington, p. 457〕。これらはきわめて多岐にわたっているが、全く共通点がないわけではない。それは、これらの要素の全てが、既存の秩序の正当化という何よりも重要な目的に奉仕するものであることである。すなわち、現在の

秩序を、神の意思によるものゆえに、あるいは、慣習や伝統によるものゆえに、否定しえないと見る点に、また、社会における不正あるいは悪については、人間が本質的に悪しき存在であるがゆえに除去しえないものと見る点に、それは現れている。他方、不正を根本的に改革しようとする試みに対しては、体系的・抽象的な思想を嫌悪することにより、また、その基礎にある人間理性重視の価値観に不信をもつことにより、否定しようとする。これらに見られるように、保守主義の本質は、端的に言って、歴史・神・自然・人間等の名による現存制度の正当化であると言える〔p. 457〕。この意味で、また、保守主義は道具的なイデオロギーであると言いうる〔p. 463〕。

このような保守主義の本質規定に関連して、保守主義と「変化」あるいは「進歩」との関係について論じることができる。普通には保守主義は変化を容認しないもののように解される。しかし、マンハイムも論じているように、全ての保守主義が変化を否定するわけではない。確かに、一般的な保守主義である伝統主義は「一切の改良主義に反対し、一切の革新化への努力に反対する本源的な行動様式である」〔Manheim, S. 93, 八〇頁〕。しかし、歴史的概念としての保守主義（政治的保守主義）は常に革新化に反対す

るわけではない。即ち、何らかの革新が行なわれた場合に、それに対して「ある時代の政治的な意味での保守主義者がいかなる行動をとるか、当該の国と時代における「保守主義運動」の特質と構造の認識に基いて初めて概略的に答えられる」のである〔S. 94, 八一頁〕。つまり、何らかの変化に対する政治的保守主義者の反応は、常に拒否的であるのではなく、その時代その社会の置かれた状況によって異なるのだとされる。

しかしながら、現存のものを保持するというのが本来の意味であるはずの保守主義が、必ずしも変化に反対しない、あるいは変化や進歩を容認する、という主張は十分な留保をもって解されなければならない。すなわち、保守主義は、変化や進歩を本来的に望ましいものと見ているのではなく、何らかの理由でそれらを容認せざるをえないのだと考えるべきである。言い換えれば、保守主義が変化や進歩を容認するのはあくまで必要悪または手段としてである。このことは以下の引用の内に明らかに現れているように思われる。

ある論者によれば、保守主義は、特に自己と反動主義との相違を強調する場合に、進歩や変化を容認するのだが、より正確に言えば、容認されるのは、「ある限界内の変化、危険のない変化」に限られている〔吉森、一〇三頁〕。変化

や進歩がある限界を越える場合には、何らかの重要なものが危険にさらされるがゆえに、保守主義はそれを容認することができなくなる。また、「進歩を欠いた保守は、本當に維持すべきものを維持し得ない」(北岡、一頁)、という主張に見られるように、保守における「進歩」はあくまで「本當に維持すべきもの」を維持するという目的のための手段であるにすぎない。従って、進歩が「本當に維持すべきもの」を脅かす場合には、保守主義はそのような進歩を否定するに至る。これらのことをハンチントンにならって要約的に言えば、保守主義は、社会の基本的な要素を保持するために二次的な問題においては変化を黙認する必要がある、ということになる [Huntington, p. 45]。保守主義が変化や進歩を容認するのは、社会の基本的な要素が安泰であるという条件の下においてのみである。なお、ここで言う「社会の基本的な要素」あるいは「本當に維持すべきもの」とは、先に示した保守主義の本質的属性との関わりで言えば、現在存在する政治的・社会的な諸秩序を指すものと考えることができよう。

おわりに

ある一つの社会において「保守主義」が存在する場合、

それが、現存政治体制維持主義としての政治的な保守主義であるのか、それとも、単なる現状追従傾向としての保守主義であるのかを区別する必要があるように思われる。政治的な保守主義は、現在の社会政治体制が他のいずれとも異なる特定の体制であるがゆえに、例えば、貴族階級の封建主義でもなく、プロレタリアートの社会主義とも異なる、ブルジョアジーの資本主義であるがゆえに、現在の体制を維持しようとするものである。これに対して、現状追従傾向としての保守主義は、現在の社会がいかなる性格のものであるかにかかわらずなく、例えば、封建主義・社会主義・資本主義のいずれであるかにかかわらずなく、それが単に現に存在しているがゆえに、あえて反対する必要もなく、それに追従・順応していこうとする立場である。

「保守主義」という概念自体の孕む大きな問題点の一つは、単なる現状追従傾向としての保守主義と現体制維持主義としての積極的な保守主義とが混同されることである。

「保守主義」の支持者の内には、現在の状態を、必ずしもその内容とは無関係に、単に現在存在しているという理由のみで「支持(追従)」している者がいるのにもかかわらず、彼らを、それが特定の(資本主義等の)社会体制であるがゆえに現在の社会を積極的に支持しているかのように見做

させてしまふ、という詐術の存在することである。基本的には単に現状に順応していこうとする階層が、現在の体制を積極的に保持しようとする支配的階層と同じ利害意識をもってゐるのかのように見做させてしまふ可能性の存在することである。

既一九七九年に高島通敏は、当時語られはじめたいわゆる保守回帰は、イデオロギーとしての保守主義あるいは資本主義や自由主義への回帰としてではなく、政治社会体制への脱イデオロギー的な順応として生じてゐる、と指摘していたが〔高島、五頁〕、これも以上の指摘と同じ点を衝いたものであった。

註

一九八四年に刊行されたマンハイムの保守主義論〔Mannheim〕は、一九二五年にループレヒト・カール大学に提出された教授資格論文に基いている。従来知られていた、一九二七年の *Das konservative Denken (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. 57)* に所収) はその一部分を公にしたものであった。両者の異同は、一九八四年版が一九二七年論文をおおむね内に含み込む関係にある。邦訳書〔森博訳『歴史主義・保守主義』、恒星社厚生閣、一九六九年〕には一九二七年の論文が訳出されている。本稿における引用文では一九八四年版から新しく訳出したが、右訳書における対応頁も示した。

文献

- Ashford, N., *The Neo-Conservatives, Government and Opposition*, vol. 16, 1981.
- Cecil, H., *Conservatism*, Home University Library, 1912.
- (柴田卓弘訳『保守主義とは何か』、早稲田大学出版部、一九七九年。)
- Centers, R., *The Psychology of Social Classes*, Princeton University Press, 1949. (松島静雄訳『階級意識』、東京大学出版会、一九五八年。)
- Eysenck, H. J., *The Structure of Social Attitudes*, *British Journal of Social and Clinical Psychology*, vol. 14, 1975.
- Huntington, S. P., *Conservatism as an Ideology*, *American Political Science Review*, vol. 51, 1957.
- 北岡勲、『保守主義研究』、弘文堂、一九六〇年。
- 小松茂夫、『保守の価値意識』、岩波講座 現代思想Ⅴ 反動の思想、岩波書店、一九五七年。
- Mannheim, K., *Konservatismus: Ein Beitrag zur Soziologie des Wissens*, (Hrsg. von D. Kettler, u. a.), Suhrkamp, 1984.
- 村上泰亮、『新中間大衆の時代』、中央公論社、一九八四年。
- 中野秀一郎、『アメリカ保守主義の復権』、有斐閣、一九八二年。
- Nisbet, R., *Conservatism and Sociology*, *American Journal of Sociology*, vol. 58, 1952.
- Nisbet, R., *Conservatism*, T. Bottomore & R. Nisbet (eds.), *A History of Sociological Analysis*, Heinemann, 1979.

西部邁、『幻像の保守へ』、文藝春秋、一九八五年。

佐々木毅、『現代アメリカの保守主義』、岩波書店、一九八四年。

高島通敏、政党の衰退と日本の保守化、『思想の科学』、一〇四号、一九七九年。

Wilson, G. D. (ed.), *The Psychology of Conservatism*, Academic Press, 1973.

山崎正和、『柔らかな個人主義の誕生』、中央公論社、一九八四年。

吉森護、保守主義に関する研究Ⅳ、『広島大学教育学部紀要第一部』、二七号、一九七八年。

(本学特別研修員 社会学)